

重病でも口をきれいに

ちょっと 元気に

耳かきでいえば、綿毛の部分にあたるものです。

歯ブラシ用の毛を針金に植え、球状にした「く

るリーナブラシ」を、考案者の黒岩恭子さんはこう表現する。神奈川県茅ヶ崎市で開業して28年になる歯科医である。

耳かきでいえば、綿毛の部分にあたるもので、食べかすやネバネバをかき出す道具だ。どこに当たっても痛くないのが綿毛に似る。

柄の部分も針金なので柔らかくしなり、口内をくるくると自在に動かせる。

茅ヶ崎徳洲会総合病院では、手術の直後や意識のない患者にこれを使う。口の清潔さが肺炎の予防に直結するからだ。

内山トミ子看護師長は「以前は大きめの綿棒を使っていたが、時間がかかるわりにきれいにならない。このブラシだとシヤカシヤカシヤカで終わる。その刺激が意識の回復も早めるようです」という。

島根県の松江市立病院は昨秋から入院患者に、くるリーナブラシを買ってもらっている。市販品は470円だ。

言い出したのは言語聴覚士の竹内茂伸さんだ。話せなくなった人の言葉を取り戻すのが専門である。のどの機能訓練という立場から、ものを飲み込みにくくなった人が食べられるよう手助けもしている。

1年前、口内をきれいにする良い方法はないかと医師から相談されたとき、「口の「リハビリ」の講演で感銘を受けた黒岩さんのことが思い浮かんだ。病院に招き、手本を見せてもらった。評判は上々で、このブラシを病院全体で使うことになった。

今、ほとんどの病院で口内は放っておかれています。「病院は無歯科医村なんです」と、藤田保健衛生大学医学部リハビリテーション医学講座の才藤栄一教授はいう。教授の研究グループがリハビリ病棟の入

院患者151人を調べたところ、9割以上に歯の治療が必要だった。ところが、大半が何も訴えていなかった。訴えることもできなかったのだらう。医師は口内に関心がなく、歯科医は院内にいない。

「最近の研究で、歯の治療をすると生活の自立度が上がるという結果も出た。口の中がきれいになって、ご飯が食べられるようになれば元気になる。その常識的なことが、病院ではできていないのです」

障害を持っていても病気になっても、ずっと口から食べてほしい。そう願って、黒岩さんは一人ひとりに合わせていろいろな道具やりハビリの手法を工夫してきた。

なかでも、10年ほど前に考案した、くるリーナは自信作だ。「口臭がなくなった」「食べっぷりがよくなった」といった声をよく聞く。ほとんど意識がなかった28歳の青年は、両親から毎日、このブラシによる口のそうじしてもらったところ、周りの声に反応するまでになった。

高齢者施設から療養型病院へ。さらに一般の病院へ。小さな道具が少しずつ医療の谷間を交えている。